

**曲がったことが嫌いな
31歳正義感妻が年下バイトに
オホ声絶頂を叩き込まれ、**

**夫と暮らす自宅で
完全に壊される調教記録**



プロローグ

車のサスペンションがギシ、と軋むたび、足元でカサリと間の抜けた音が鳴る。

特売の長ネギと、タイムセールの豚バラ肉。ビニール袋越しに透ける生活用品が、靴も脱がされずシートに四つん這いにさせられている私の爪先に触れていた。数十分前までは、今日の夕飯を豚汁にするか生姜焼きにするかで頭を悩ませていたはずだった。

主婦の日常なんて、その程度のささやかな選択で成り立っている。

それが今や、捲り上げられたロングスカートの裾を無様に揺らし、ワンボックスカーの後部座席で背後から腰を打ち据えられているのだから、笑えない冗談にもほどがある。

「ほらキョウカ、旦那の晩飯の心配してんの？ そんなことより、俺ので腹いっぱいになりなよ」

スモークフィルムが貼られた窓の外を、買い物カートの金属音がカラカラと通り過ぎていく。夕方のスーパーの駐車場。ガラス一枚隔てた向こうには、平穏な家庭を守る名もなき人々が歩いている。少しでも大きな声を出せば、

即座に不審車両として通報されるだろう。

「……っ、あぐ、や、め……ッ。早く、帰んなきゃ……あいつが、帰ってきちゃう……ッ！」

「あいつ、ねえ。プロの女に金払ってスッキリして帰ってくる旦那のために、健気にネギ抱えて帰るわけ？ 相変わらず尽くすねえ、奥さん」

耳元でシルバーピアスが鳴り、金髪の毛先が私の耳をくすぐる。日焼けした肌から漂うのは、メンソール煙草と、夜遊びの場によくある甘ったるいブランド香水の匂い。十歳も年下の、普段は軽薄にへらへら笑っているだけのガキに、私は完全に組み敷かれていた。

「ほら、腰引けてんぞ。もっと突き出して、足開けよ。奥まで届かねえだろ」
「ん、あッ……！ ひ、ぐう……っ、そ、んな、奥……ッ！」

背後から容赦なく叩き込まれる熱く硬質な衝撃が、私の思考を根こそぎ奪っていく。肉と肉がぶつかり合う湿った重い音。体格の差をまざまざと思い知らされる暴力的なまでの律動に、シートの革張りに立てた指先が悲鳴を上げていた。

「んああああ！！」

「おいおい、声デカいって。ほら、シートの革でも噛んでろよ。外の人に全部バレんぞ？」

タクミが私の腰骨を乱暴に掴み直し、嘲るように鼻を鳴らした。

命令されるたび、悔しさに奥歯を噛み締めようとするのに、重ねられた調教の記憶を刻み込まれた下腹の芯は、この傲慢なガキを拒むどころか、貪るように熱く締めつけてしまう。

「……って言っても、無駄か。お前、人に見られるかもしれないってビビりながら犯されるの、大好物だもん。声我慢するフリして、下は発情した野良犬みたいにヒクついてんぞ」

汚い言葉で雌犬のように扱われるたび、悔しさと羞恥で頭がおかしくなりそうになる。しかし、体に刻み込まれた調教の記憶が、その侮辱すら極上の蜜に変えてしまう。

「っ、ふ、う……んッ、あ……ッ！　タク、ミ……っ、もう、やだ……っ！」

「やだ？　口ではそう言って下はすっげー吸い付いてんじゃん。ほら、ガラスの向こうの主婦仲間にも聞かせてやれば？　『うちの旦那より若い男の腰使いの方がいいです』って言ってみろよ、ほら！」

「だ、誰が……ッ、言うか……ふざけ、んな……っ、あ、ああッ！」

意地を張って吐き捨てようとした言葉は、一番敏感な急所を抉るように突かれた瞬間、甲高い嬌声へと無惨に裏返った。

「声漏らすなって言った傍からこれかよ……ほらキョウカ、顔こっち向けろ。誰に突かれてるか、その目でしっかり見ろよ」

乱暴に髪の毛の根元を掴まれ、無理やりのけぞらされる。背筋を電流のような

痺れが駆け上がり、視界の端で夕暮れのオレンジ色がチカチカと明滅する。引き絞られた視線の先、間近に迫っていたのは、獲物を観察するように細められた冷酷な琥珀色の瞳と、優越感に歪んだタクミのニヤツとした笑い顔だった。

「旦那じゃねえ、お前をこんなだらしなくイかせてやるのは俺だ。よく覚えておけよッ！」

耳元で叩きつけられた嘲笑とともに、子宮の真下を小突くような最後の一撃が、逃げ場のない最奥へと容赦なく深く押し込まれる。

「あ、ぎ……ッ!? ひ、いいい——ッ!!」

喉の奥から濁点交じりの汚声が張り裂け、車内の狭い空間に反響した。

頭蓋骨の裏側が真っ白に弾け飛ぶ。熱い脈動が奥底に注ぎ込まれる感触とともに、私の意識は快楽と屈辱の濁流に呑み込まれ、指先はシーートの革を無力に滑り落ちて、そのままネギの転がる足元へと崩れ落ちた。

ガクガクと小刻みに震える太ももに力が入らず、私は崩れ落ちた姿勢のまま、車のフロアマットに額を沈めていた。最奥に注ぎ込まれた熱い重みは、私の意思など嘲笑うように容赦なく胎内を満たし、立ち上がることにすら許してくれない。

「おい、キョウカ。まだ生きてる？」

シートに突っ伏したまま、無様に尻を突き上げた格好の私の臀部に、タク

ミの手のひらが容赦なく振り下ろされた。

——パチーンッ！

「ひゃ、うんッ！？」

狭い車内に乾いた破裂音が響き、鋭い痛みにも情けない悲鳴が喉を跳ねる。その刺激に下腹部が反射的にキュッと引き絞られた拍子に、奥底に溜め込まれていた熱い白濁液が、ぬぷつと音を立てて太ももの内側へとこぼれ落ちた。

「うわ、汚ねえな。さっさとしまえよ、だらしねえマンコだな」

吐き捨てるような嘲笑とともに、カサリと無造作な音を立てて、私の乱れた髪の毛の横にボックスティッシュが放り投げられる。

涙で霞む目で見上げれば、ジーンズのファスナーを気だるげに引き上げるタクミが、どこか退屈そうに喉を鳴らしていた。ほんの数分前まで私の背中を組み敷いていたはずの獣のような熱量は綺麗さっぱり消え失せ、そこにあるのはただの身勝手で冷酷な若さだけだった。

「……っ、ハ……ふざけ、んな……。誰のせいだと、思ってんのよ……ッ」
「誰のって、奥さんの欲求不満のせいでしょ。はい、お疲れ。旦那にバレないように、ちゃんと念入りに拭いて帰ってね？」

悪びれもせず、普段の軽い調子で笑みを貼り付けたまま、タクミはスマホの画面に視線を落とす。

鼻腔を突くのは、足元に転がるレジ袋から漂う長ネギの青臭い匂いと、車内の合皮の革の匂い、そして、この男が私の内側に刻みつけていった、抗いようのない雄の匂い。

ティッシュを引き抜き、震える指先で内太ももを伝う熱を拭いながら、私はスモークフィルムの貼られた暗い窓を睨みつけた。

——私は、一体どこで間違えたんだろう。

ただ、筋を通じたかっただけだった。

曲がったことが嫌いで、サバサバしているねと周囲に言われ、夫を支えて家庭を守る「ちゃんとした大人」の女として、胸を張って生きてきたはずだったのだ。

それなのに、今やこんな年下のガキの言葉一つで身体を疼かせ、夕暮れの駐車場で人目におびえながら喘ぎ声を押し殺している。

思考の輪郭が、じわじわと過去の底へ溶け落ちていく。

すべての歯車が音を立てて狂い始めた、あの日。

夫の財布から零れ落ちた、あの薄汚れた風俗店のレシート。

うすべての始まりの光景が、夕闇に染まる私の脳裏に、鮮明に焼き直されようとしていた。

第一章

札束を数える機械のけたたましい回転音が、静まり返った店内に響いていた。

閉店直前の古着・ホビーショップ。古びた衣類と段ボールの埃っぽい匂いの中、私は金属製のコイントレーに硬貨を叩きつけるように落とす。

「……マジでふざけてる。あり得ないんだけど」

怒りに歯を食いしばりながら、胸ポケットにねじ込んだままのくしゃくしゃになった紙片を指先で睨みつけた。

今朝、洗濯機の前に脱ぎ捨てられていた夫のデニム。そのポケットから零れ落ちた、繁華街の雑居ビルの名が印刷された一枚の領収書。

「キョウカさん、ため息ばかり吐いてると幸せ逃げるっすよ？」

隣で古着の整理をしていたタクミが、明るい金髪の毛先を揺らしながら飄々と言った。日焼けした肌に、人懐っこい笑顔。「くっすね」が口癖の、要領ばかり良い十歳下の大学生バイト。

「うるさい。アンタには関係ないでしょ」

「関係なくはないっすよ。そんな怖い顔されたら、こっちまで空気重くなる

じゃないっすか。で、何なんすかそれ。朝からずっと機嫌悪いの」
「……夫」

言葉にするだけで、奥歯が軋む。

「家ではここ何年も『疲れてる』だの『その気になれない』だの言っ
て私を完全に放置のくせにさ。外で金払って若い女に抜いてもらっ
てんの。マジでふざけんなっつーの。私をバカにするのも大概にし
ろって話」

吐き捨てるように荒く言う私を、タクミは目を丸くしたあと、ふつと意味ありげに細めた。

その視線が、私の首筋から、Tシャツ越しでも主張を隠せない胸元、そして引き締まった腰のラインへと、無遠慮に滑り落ちていく。

「へえ……旦那さん、見る目なさすぎっすね」

「は？」

「だって、キョウカさんこんなにいい身体してんのに。旦那の好みじゃないとしても、男なら普通にそそられますよ。もったいねえ」

「……ガキが生意気言っ
てんじゃないわよ」

そっぽを向いて無視したものの、乾ききっていた私の自尊心にその軽薄な言葉がじわりと染み込んでいくのが分かった。女として扱われていないという屈辱の痛みに、安っぽいアルコールを注ぎたくなったのは、そのほんの少しの隙のせいだった。

「ならさ、せつかなら俺と飲んで憂さ晴らししようよ。奢ってあげますから」

「アンタに奢られる筋合いはないけど……酒なら付き合ってやるわよ。とことん愚痴ってやるから覚悟しな」

そう返したのが、すべての判断の狂いだった。

！

駅裏の薄暗い居酒屋。安酒のグラスが三杯、四杯と空くにつれて、頭の芯がじんわりと痺れていく。

「だいたいさあ、あいつ何様のつもりなわけ？ こっちは毎日パートして、帰って飯作って、部屋だつて綺麗にしてんのよ？ それなのに『今日は疲れてるから』って背中向けてさ。そのくせ外じゃ金払って若い女に抜いてもらってるとか……マジで意味わかんない！ 私を舐めてんのよ、完全に！」

すっかり呂律の怪しくなった舌でジョッキをテーブルにドンと叩きつけると、氷がカランと情けない音を立てた。頬は熱く火照り、怒りと酔いで視界がふわふわと揺れている。

「旦那が外でやってんならさ、キョウカさんだけ真面目に我慢してるの、マジで損じゃないっすか？」

「……でしょ！？」 あんたもそう思うでしょ！ あいつが先にルール破ったんだから、私だって何したって文句言われる筋合いなんてミリもないわよ」「そうっすよね。大人の女が欲求不満のまま放置されるとか、一番罪深いっすよ……ていうかキョウカさん、さっきから愚痴るたびに胸元開きすぎて目のやり場に困るんすけど。旦那には見せないのに、俺には見せてくれんだ？」

「はあ？ 何言ってるのよ、暑いんだからしょうがないでしょ。ガキが生意氣言ってるんじゃないわよ……」

普段なら即座に引っ叩いているような軽口も、麻痺した頭ではただのからかいにしか聞こえない。むしろ、女として見られているという安っぽい優越感が、乾ききった自尊心をくすぐっていた。

「へえ、ならもつと見せてほしいっすね。キョウカさんってさ、脱いだら絶対もつとヤバイ身体してんでしょ」

タクミがニヤリと唇を歪め、テーブルの下で膝をすつと寄せてくる。

デニム越しに伝わる体温の高さと、ふわりと鼻腔を掠める甘いブランド香水の匂い。その近さに身を引くことも忘れ、アルコールで緩みきった警戒心がほどけていく。旦那だってやってるんだから。その甘美な免罪符が、私の理性のブレーキを一つずつ、心地よく外していった。

「ちよつと風に当たりましょ」と店を出され、タクミに肩を抱かれるようにして歩いた夜風。千鳥足のまま路地を曲がった先、目の前に現れた派手なネオンサインに、私は足を止めた。

「……ちよつと、ここ」

「いいじゃないっすか。静かなところで、ゆっくり続き話しましうよ」

「バカ言つてんじゃないわよ、調子乗るな……ッ」

引き返そうとして素通りを装った瞬間、ぐつと引き戻されるように腰を強く抱き寄せられた。

「おっと、どこ行く気っすか？」

「きゃっ……!!？」

よろめいた私の背後から、タクミの逞しい腕が回り込み、そのまま無遠慮に伸びた大きな手のひらが、薄いタイトスカート越しに私の尻の肉をこっそりとわしづかみにした。

「ひゃ、う……っ!？」　な、何すんのよ……っ!」

「いい柔らかさ。キョウカさん、マジでスタイル最高っすね」

ホテルのエントランスのすぐ前、通りに面した場所だというのに、タクミは指を深く沈め、手のひら全体で私の尻を大胆に揉みしだいてくる。肉を左右に弄ばれるたび、裙地の奥に男の手のひらの生々しい熱がじわりと伝わってきた。

「ふぎけ、んな……っ！ 離しなさいよ、外よここ……ッ！」

「外だから興奮すんじゃないっすか。ほら、声我慢すんの大変っすね」

「誰が……っ、ん、あ……っ！」

怒鳴りつけようと口を開いたのに、ぐにりと一番際どい部分を押し潰され、情けない嬌声が唇を割って零れる。夜風が吹いているはずなのに、背筋にじつとりと熱い汗が滲み出していた。アルコールのせい、それとも路上で尻を弄ばれる異常な羞恥のせい、か、心臓が早鐘のように胸を叩く。

突き飛ばして逃げ出すことだってできたはずだった。けれど、払いのける私の手にはまったく力が入らず、まるでただ甘えるようにタクミの胸元を押しているだけ。

そんな見せかけだけの抵抗を、タクミは見透かしたように鼻を鳴らした。長い指先が私の手首を捕らえ、ぎゅつと逃げ場を塞ぐ。普段の頼りない後輩の力とは思えない、男の硬く強い力だった。

「キョウカさん、もう帰る気ないでしょ？」

低く掠れた声が耳元に落ちた瞬間、背筋にぞくりと甘い悪寒が走る。

図星を指され、言葉を失った私の唇が奪われる暇もなく、引きずり込まれるようにして踏み入れたエントランス。自動ドアの開く無機質な電子音が夜の静寂を切り裂いた。

カードキーが差し込まれ、部屋の明かりが点いた瞬間、背後でカチャリと

重いオートロックの音が落ちた。

微かに漂う消毒液と甘い芳香剤の匂い。足元に広がる毛足の長い絨毯を踏みしめたところで、ようやく酔いに霞んでいた頭の隅で警報が鳴り響いた。三十一歳の分別ある大人の女が、十も下のバイトのガキに連れられてホテルの密室にいる。その事実の重さに、背筋へ冷たい汗が伝う。

「……やっぱり、帰る。いくらアイツに腹が立ってても、こんなの筋が通らな——」

踵を返そうとした私の肩を、不意に強い力で掴まれた。

「キョウカ、さっさとしろよ」

「……え？」

振り返る間もなく、キングサイズのベッドへと乱暴に突き飛ばされる。バリと鈍いシーツの沈み込む感触に身を起こそうとした私の胸元を、タクミの長い腕が易々と押さえつけた。

「……は？ ちよつと、なんなのよ。急に呼び捨てにしてんじやないわよ」
威嚇するように鋭く睨みつける。けれど、見下ろしてくるタクミの顔から、バイト先で見せていた愛想のいいヘラヘラした笑みは綺麗さっぱり消え失せていた。日焼けした精悍な顔立ちのまま、冷酷な光を宿した切れ長の瞳が、ただの獲物を値踏みするように私を射抜いている。

「立て。服、自分で脱げよ」

低く乾いた、絶対的な命令口調。その冷徹な豹変ぶりに、喉の奥が引き攣る。

「ふざけんなガキ、調子乗ってんじゃねえよ！ 離しなさいよッー！」

もがいてその腕を振り払おうとしたけれど、びくともしない。脱ぎ捨てられたジャケツトの下、引き締まった男の腕力が、私の両手首を頭の上でひとまとめに締め上げる。

「威勢がいいのは口だけっすね……いや、もう敬語とかいらねえか。キョウカ、お前さ、自分がどんな立場か分かってんの？ 逆らって痛い目見るか、大人しく言うこと聞か、今すぐ決めろよ」

「な、にを……ッ！」

身を振る私の抵抗を意にも介さず、タクミの空いた手が無造作に私のスカートの裾を掴み、腰の上へと一気に捲り上げた。

もがいて逃れようとする私の脚を前に、タクミは面倒そうに片手で頭をガシガシと搔いた。

「あー、もういいや。抵抗すんなら力づくでいくわ。ぐちゃぐちゃになって着るものなくなっても、俺は別に関係ねーし」

その無慈悲な声と同時に、ビリビリッ、と繊維の裂ける甲高い音が密室に響き渡る。

足首まで覆っていたストッキングが容赦なく引き裂かれ、乱暴な力でシヨ

「ッごと一気に引きずり下ろされた。」

「やめろ、変態ッ！ 触るな、離さないよッ！」

必死の罵声を浴びせても、タクミの冷たい瞳は嘲笑を浮かべるばかりで何の動揺も見せない。

彼はベッドの上で身動きを取ろうとする私の背後へと素早く回り込むと、逞しい両脚を私の太ももの内側に強引に割り込ませてきた。万力のように硬い脚力で外側へと押し広げられ、大の字に近い無様な格好で下半身の自由を完全に封じられる。

「暴れんなんて。ほら、いい眺めじゃん」

拘束された私の視線の先で、タクミのポケットから取り出されたのは、滑らかなフォルムをした見慣れない小型の機械だった。

「これ、知ってる？ 旦那が使ってくれないなら、俺がこれで遊んでやるよ」

「っ、何それ……やめ、触るなッ！」

「動くなよ。余計に痛い目見るぜ？」

「チ、と小さな起動音が響き、低く微細なモーター音が部屋の静寂を震わせる。」

遮る布地すら奪われた、露わな中心部へその先端が直に、寸分の狂いもなく押し当てられた。

「ひ……ッ！？」

声にならない悲鳴が喉を跳ね上がった。

肌が触れ合っているわけでもない。ただ、空気の震えと真空の圧迫感が、ピンポイントで一番敏感な突起を丸ごと吸い上げるような、未知の暴力的な刺激。

「あ、ぐ……ッ！ や、め……ッ！ なに、これ……っ、止めてえッ！」

逃げ出そうと必死に腰を引こうとしても、背後からがつしりと絡められたタクミの逞しい両脚が、無慈悲に私の太ももを外側へと固定し続ける。どれだけでもがいても、女の力などではビクともしない。むしろ暴れれば暴れるほど、露わになった最奥がタクミの視線の前に無防備に押し広げられていく。

「うわ、すげえ。当てた瞬間からめちゃうちゃ跳ねるじゃん」

タクミは低く喉を鳴らし、逃げ場を失った私の下腹部を至近距離からじつくりと見つめ回した。冷徹で下品な光を宿した瞳が、晒された秘部の細部を舐め尽くすように観察していく。

「キョウカ、旦那にどんだけ放置されてたんだよ？ ここ、もう熱くてパンパンじゃん。……見てみろよ、普段の澄ました顔の裏で、こんな色にして熟れきってんの。形もすっげー露骨に膨らんで、オモチャに吸い付いて離れねえよ」

「ちが、う……ッ！ 見ない、で……っ！ ふざけ……んああッ！」

口汚く罵られ、色も形も暴かれながら、機械の吸引口は容赦なく急所を丸

ごと吸い上げ続ける。

肉の内側に閉じ込められていた過敏な芯が、真空の圧力で無理やり引き摺り出され、強烈な微振動で直接擦り上げられていく。

「ほら、赤黒くなつてどんどん飛び出してくる。旦那に触ってもらえないから、こんなガキのオモチャにまで必死に欲情してやがる。三十過ぎのオバサンが、こんなだらしのない姿見られてどんな気分？」

「や、ああッ……！　言うな……っ、そんなこと、言わない……っ、あぐうッ！」

強がりを吐き捨てようとする私の唇から、屈辱の涙とともに甲高い喘ぎ声が漏れ出す。

夫との長いレスで飢えきっていた私の神経は、理性の命令を完全に無視していた。触れられたこともない未知の振動が、一瞬で下腹の奥底を焼き焦がしていく。耳元で浴びせられる容赦ない言葉責めが、一番効いてはいけな毒のように私の羞恥を燃料にし、強制的に引き絞られた肉体を、逃れられない快楽の泥沼へと引きずり込んでいった。

「ほら、一回目。もうイキそうじゃん」

「や、だ……ッ！　イカない、こんなガキのオモチャで……ッ、あ、ああッ！」

否定しようと首を振るのに、下半身は完全に私の意志から切り離されてい

た。吸い上げられる急所の熱さに突き動かされるように、拘束された足の間で、腰がへこへこと浅く無様に跳ね始める。機械の先端へ、自ら貪るように中心を押しつけ、擦り寄せてしまう。

「うわ、見ろよこれ。口では嫌がりながら、腰が勝手に動いてんぞ。我慢できずに自分から擦りつけにきてんじゃん」

タクミの底意地の悪い嘲笑が、耳元に生々しく吹き込まれる。

「お、っ……！ おっ、お……っ、あぐ……ッ！」

言葉を紡ぐ余裕すら奪われ、喉から漏れ出るのは「おっ、おっ」という短く情けない呼吸ばかり。理性も大人のプライドも剥ぎ取られた、ただ刺激に悶える肉の塊。

「声まで変わってきたな。おっ、おっ、て……動物かよ。発情したメス犬そのものだ、キョウカ」

カチリとダイヤルが一段階引き上げられた瞬間、下腹部を強烈な電撃が貫いた。

「お、っ……ひ、ああああッ！！」

背中が弓なりに跳ね上がり、シーツの布地を爪が引き裂くように食い込む。頭の中が真っ白に弾け飛び、意思とは無関係に最初の絶頂が無様な身体を激しく痙攣させていた。

「はは、口では生意気言ってんのに、下はすっぱー素直。ビショビショじゃ

ん」

「あ、は……っ、もう、やめ……息が……ッ」

「やめるわけないだろ。まだ始まったばかりだぜ？」

慈悲など最初からなかった。

果てたばかりでピクピクと痙攣し、熱を帯びて過敏になりすぎた突起から機械を離すどころか、タクミはダイヤルを最大へと容赦なく回し切った。

「ひ、ああああッ！？ や、だ……ッ！ もう、イッた……イッたからあッ！」

「知ってるよ。すっげー締まってたもんね。でもさ、ここからが本番でしょ？」
「やめて、お願い……っ！ たすけて……っ、壊れちゃう、壊れちゃうからあッ！」

猛烈な吸引と凶暴な振動が、逃げ場のない急所を根こそぎ吸い上げ、無理やり過剰な快楽の渦へと叩き落とす。脱力していた腰が再び跳ね上がり、涙と涎でぐしゃぐしゃになった顔をシートに擦りつける。

「あは、たすけてっ誰に言ってるの？ 旦那？ それとも俺？ 三十過ぎた人妻がオモチャに負けて情けなく泣きついてくんの、マジで最高にウケるんだけど」

「タクミ……っ、たすけ……っ、ゆるして……っ、あ、ぐうううッ！！」
「やーだね。ほら、もっと腰振って懇願しろよ。壊れるまでイかせてやるか

らさ」

嘲笑とともにさらに強く押し当てられ、私の喉からは掠れた悲鳴と混ざり合うように、次の絶頂を前にした狂乱の喘ぎ声が止まることなく漏れ出していた。

「ごめんなさい……っ！　もう、やめて……お願いだから、許してえッ！」
乱れた前髪を涙で額に張り付かせ、私はプライドの破片すら残っていない声で叫んでいた。年下の男に組み敷かれ、機械の暴力的な細動に翻られ、三十一年の人生で積み上げてきた分別のすべてがシーツの染みとなつて溶け出していく。ただこの責め苦から逃れたい一心で、無我夢中に謝罪の言葉を繰り返す。

そんな私の涙に濡れた顔を見下ろし、タクミは底意地の悪い笑みを口元に浮かべた。

「いいぜ。……あと十回イッたら、許してやるよ」

「じっ……十回……!？」

耳を疑うような数字に、息が止まりかけた。

十回なんて耐えられるはずがない。一度や二度でさえ頭の芯が焼き切れるような衝撃なのに、そんな回数を重ねられたら、本当に女として、人間としての何かが完全に壊れてしまう。

絶望に目を見開き、その無慈悲な宣告を反芻する間すら、男は与えてくれ

なかった。

「ほら、二回目」

先端をより深く、逃げ場を塞ぐように強く押し込まれた瞬間、下腹部を再び真っ白な熱雷が貫いた。

「——ッ!? ひ、ああああッ!!」

拒絶の言葉を紡ぐはずだった舌が引き攣り、喉の奥から甲高い悲鳴が迸る。休む暇なく過敏な神経を抉られた肉体は、恐怖とは裏腹に抗いようのない反射を起こし、背筋を狂ったように跳ね上がらせた。下腹の奥が痛烈に引き絞られ、意思を置き去りにしたまま、私は二度目の絶頂の濁流へと呆気なく叩き落とされていた。

「ほら、休んでんじゃねえよ。三回目いくぞ」

「まっ……待って、息が、できない……ッ! あ、ぎ、やああッ!!」

「マジで反応いいな。ほら、もう三回目終わり。次、四回目」

「や、だ……ッ! もう、無理……ッ、お腹、千切れちゃう……ッ、あ、あ、ああああッ!」

「千切れねえよ。ほら、腰浮いてんぞ。自分からオモチャに擦りつけてんじやん。五回目な」

「ひ、ぐ……ッ!? ちが……ッ、勝手に、動い……おっ、おっ、お、おッ!」

「あはは、五回目で早くも言葉になってねえし。顔やべえよキョウカ。目え泳いで舌出かかってんぞ」

「ふ、あ……っ！ た、く……み……っ、もう、らめ……っ、らめえッ！」

「らめえ、じゃねえよ。まだ半分だっつーの。ほら、六回目！ もつと啼け！」

「あ、ぎッ……！ お、ほ……っ！ ひ、あああああッ！！」

「うわ、今の声なに？ オホって言った？ 三十過ぎの人妻がオホ声出して

絶頂とか、マジでたまんねえんだけど」

「ん、お……っ！ あ、たま……まっしろ、になっ……ひ、いいいいッ！」

「七回目！ いい顔になってきたじゃん。完全に白目剥いて口元からヨダレ垂れてんぞ」

「あ、う……っ、おっ……ほお……っ！ い、く……っ、また、イツちゃううッ！」

「イケよ、八回目！ ほら、もっとだらしなく痙攣しろよ！」

「おほ、おおッ！ ひ、ぎい……っ、あ、あ、あ……っ、ん、にやあああッ！」

「声が完全にバグってんじやん。猫かよ。九回目！ 逃がさねえからな、奥まで押し当ててやる！」

「あ、ひ……ッ！？ の、脳みそ、とけ……っ、おほおおおおおッ！！ ん、ぐ、ああああッ！」

「すっげえビクビク跳ねてんじやん。ラスト、十回目だキョウカ！ 頭空っ

ぽにして全部壊れろ！」

「お、ほ……ッ！ あ、ひいひいひいひい——ッ！！ ん、お、おおおお……ッ！！」

全身の血が逆流するような衝撃とともに、最後の絶叫が喉を引き裂いた。背骨を走る激しい痙攣の果てに、プツリと頭の中で何かが切れる音がする。両腕から完全に力が抜け、頭の上に投げ出されたまま、私はシーツの海へ沈むようにぐったりと脱力していた。指先一つ、まぶた一枚すら、もう自分の意思では動かすことができなかった。

視界の端がチカチカと明滅し、酸欠の肺が熱い呼気をもがき吐き出していた。

シーツに突っ伏したまま、指先ひとつ動かせない。十回も連続で頭の芯を焼き切られた身体は、だらしなく熱を滴らせて震えていた。それでもここで完全に屈服したら、私のすべてが終わるといふ最後の意地だけが、喉の奥に踏みとどまる。

「……っ、ハ……もう、やめろ……ッ。調子、乗んな……ッ」

乱れた前髪の間隙から、濁った目でタクミを睨み上げた。

だが、その強がりを見下ろすタクミの口元に浮かんだのは、冷淡な愉悅の笑みだけだった。

「まだそんな生意気言えんだ……じゃあさ、ここからが本番ね」

カチャリと無機質なバックルの音が鼓膜を叩き、デニムが乱暴に足元へと落とされる。

息を呑んだ私の目に飛び込んできたのは、日焼けした引き締まった身体には明らかに不釣り合いな、凶暴なまでの熱塊だった。

太く、硬く、血管を浮き上がらせて反り返ったそれは、夫のものしか知らなかった私の常識を暴力的に覆す。幾度も夜を過ごしてきたはずなのに、本能在、あれは受け入れられる器を超えていると甲高い警報を鳴らしていた。

「嘘……っ、待って、無理……入らな、いッ！」

「知らねえよ。散々濡らしたんだから、いけるだろ」

「や、だ……触るなっ、入っ……あ、ぐ、ああッ!？」

膝を抱え込もうとする私の太ももが強引に割られ、拒絶の言葉を飲み込む隙もなく、先端が狭い入り口を押し広げた。

裂けるような圧迫感と、過敏になりすぎた粘膜を無理やりこじ開けられる摩擦熱。悲鳴を上げる間もなく、タクミの腰が容赦のない力で一気に踏み込まれる。

「ひ、ぎ……ッ! あ、嘘、奥……っ、奥まで、来てる……ッ!」

「キョウカ、締めすぎ。旦那、こんなとこまで届いたことないだろ」

息が止まる。

根元まで一息に埋め尽くされた瞬間、子宮の入り口を直撃する重い衝撃が

下腹を貫いた。夫の穏やかな営みでは決して触れられたことのない、私の身体のもっと深い領域。そこを、この傲慢な年下の男が暴力的な質量で占領している。

「動くな……っ、抜いて、頼むから……ッ！」

「誰が抜くかよ。ほら、イけよ、キョウカ！」

無慈悲な宣告とともに、ベッドを軋ませる激しい律動が始まった。

玩具による執拗な刺激で極限まで過敏になっていた神経は、下腹の奥を小突かれるたび、抵抗の余地もなくその衝撃をダイレクトに快楽の毒へと変換してしまう。

「あ、っ！ や、め……ッ！ そんな、な……お、ほおッ！？」

初撃を深く叩き込まれた瞬間、私の喉から跳ね上がったのは、大人の女性とは思えない濁った汚声だった。顎がぐくりと外れたようにだらしなく落ち、口元から細い涎がシートへと零れ落ちる。

「うわ、ぶっさ。何その顔」

背後から打ち据えるタクミが、心底見下げ果てたように鼻を鳴らした。

「一発突かれただけで白目剥いて『オホ』とか鳴いてんの？ 三十過ぎの澄ました人妻が、マジで台無しだな」

「ちが……っ、ふざけ……ッ！ あ、ひいいッ！ お、ほ……っ！」

「何が違うんだよ。ほら、声隠す気ゼロじゃん。もっと腰浮かせろよ。旦那

の何倍気持ちいいか言ってみろって」

「あ、たま……っ、おかしく、なっ……おほおッ！ た、くみ……っ！」
「名前呼んで縋りついてくんじゃねえよ。ほら、もつと下品に啼けよ、キョウカ！」

突かれるたび、脳天を直接殴られたような白濁した痺れが駆け抜ける。

夫への意地も、主婦としての誇りも、人生で積み上げた分別も、すべてが容赦なく内奥を穿つ熱い杭によって木っ端微塵に碎かれていく。耳元で浴びせられる侮辱の言葉すら、いまや火に油を注ぐだけの刺激にしかない。焦点の合わない瞳で天井を仰ぎ、ただ狂わされた肉体の疼きに身を任せる。限界を超えて膨張する熱の塊が、更なる泥沼へと私を引きずり込もうとしていた。

——駄目だ、これ以上は、壊れる。

下腹の奥底で、かつて経験したことのない異常な熱の塊が急速に膨張していく。快楽の飽和。限界を超えた肉体が、悲鳴のような収縮を起こしたその瞬間だった。

「あ、あ……っ！ 出、る……ッ！ なん、か……ッ！」
「出せよ、全部」

容赦のない最後の一突きが、最も深い急所を無慈悲に押し潰した。

「ひ、あああああ——ッ！！」

声帯が千切れるような絶叫とともに、膀胱を締めつけていた最後の留め金が呆気なく吹き飛んだ。

熱い液体が、制御を失った私の身体から勢いよく溢れ出し、シーツを音を立てて濡らしていく。絶頂の痙攣の中で、自分の意志とは無関係に排泄の羞恥を垂れ流す感覚。

「うわ、マジかよ……おもらしまでしやがった。最高に汚ねえ女だな、キョウカ」

見下ろすタクミの濁った歓喜の声が、遠く白く染まった頭蓋の底へ、救いようのない汚辱として染み渡っていった。

濡れそぼったシーツの冷たさが、徐々に熱の引いていく背中から這い上がってくる。

自分の身体から溢れ出た情けない生ぬるさと、あの男が奥深くに残していた灼けつくような重み。その二つが混ざり合って、息をするたびに鼻腔を汚していく。指先一本すら動かない。ただ、開いたままの唇から「ひゅう、ひゅう」と掠れた呼吸が零れるばかりだった。

「……っ、ハ……あ……」

「おい、キョウカ。いつまで寝惚けてんだよ」

乱暴に髪の毛の根元を掴まれ、ぐらりと頭を持ち上げられた。

首を支える力すら残っていない私の頬に、タクミの無慈悲な指先が食い込む。目の前の焦点が合わず、視界は白く滲んだままだ。

「……や、め……っ、もう、触る……な……ッ」

「触るな、ねえ。あんなにギャーギャー鳴いて、下から垂れ流してたくせに？」
冷たい嘲笑とともに、私の右手が強引に引き上げられた。

力なく丸まった私の人差し指と中指を、タクミの長い指が無理やり押し広げ、不格好なピースの形に固定する。

ピピッ、と電子音が鳴った。

直後、至近距離で閃光が爆ぜる。カシャ、カシャ、カシャと、無機質で乾いたシャッター音が、静まり返った部屋に連打された。

「ひ、っ……なに、撮って……っ!？」

「ほら、見ろよ。自分の顔」

突きつけられたスマートフォン液晶画面。

そこに映っていたのは、およそ分別ある大人の女とは信じがたい、救いようのない怪物の姿だった。

涙と汗でメイクはどろどろに崩れ、顎にはだらしなく垂れた涎。焦点の合わない瞳は白目を剥きかけ、唇は淫らに半開きになったまま。そしてその横で、無惨に固定されたピースサイン。

「……嘘、でしょ……っ」

「すっげーブスな顔。これ、旦那に見られたら一発で終わりっすね？」

「っ……消せ！ 頼むから、消しなさいよッ……！」

残された気力を振り絞り、スマホを奪い取ろうと手を伸ばした。けれど、私の腕は空を切るだけで、タクミの胸板を弱々しく擦ったに過ぎない。

画面の中の女は、夫を裏切り、年下のガキの暴力的な快楽に負けて、失禁まで晒して果てた、ただの浅ましい雌だった。家庭を守る誇りも、曲がったことが嫌いだった私の潔癖さも、その一枚の液晶の中で粉々に砕け散っていた。

「消すわけないじゃん。これ、俺の言うこと聞かせるための最高の保険なんぞ」

タクミがベッドから降り、手際よく服を身につけ始める。

先ほどの獣のような熱狂はどこへやら、彼はベルトを締め直すと、くると振り返っていつもの人懐っこい薄ら笑いを浮かべた。

「いやー、キョウカさん、マジで最高でしたよ。旦那さんが放置する理由、俺には全然分かんないっすね」

その口調の変わりように、背筋が凍りつく。

敬語に戻ったその響きが、先刻の命令口調よりも遥かに冷酷な首輪となつて、私の喉元に食い込んでいた。